＜研究ノート＞

ポー、マラルメ、ドビュッシーを繋ぐ海の色[I]

近　藤　裕　子

1．はじめに
2．“アナベル・リー”とマラルメ
3．ドビュッシーの海
4．マラルメと画家たち
5．おわりに

1．はじめに

印象主義の詩人と呼ばれたマラルメ(Stéphane Mallarmé, 1842-98) は、一方で画家たちとの交流を深めていたが、彼の詩、『牧神の午後』(“L'Après-midi d'un Faune” 1865)はドビュッシー(Claude Debussy, 1862-1918)による『牧神の午後への前奏曲』(*Prélude à l'Après-midi d'un Faune*, 1894)、またニジンスキー(Vaslav Formich Nijinsky, 1890-1950)による斬新で革新的なバレエの振り付け(1912)と、ジャンルの垣根を越えて、芸術家たちの創造力を大いに掻き立てた。

マラルメが開いていたサロン（火曜会）にはさまざまな人々が集まった。[1] フランスというと17－18世紀における貴婦人たちのサロンが特に有名であるかもしれない。火曜会などの19世紀末のサロンも、芸術のジャンルの垣根を越えて芸術家たちが自らの意思で集まった。サロンにおけるさまざまな芸術の切磋琢磨が、20世紀の２度にわたる世界大戦を経たあとの、現代の文化にその肥沃な土壌を提供したといっても過言ではないように思われる。

アメリカの詩人ポー(Edgar Allan Poe, 1809-49)はボードレール(Charles Baudelaire, 1821-67)らフランス象徴派詩人に大きな影響を与えたといわれる。英語教師であったマラルメはポーに私淑し、その詩をフランス語に訳している。本稿ではポーの“アナベル・リー”(“Annabel Lee”, 1849)とマラルメ、そしてドビュッシー、ゴーギャン（Paul Gauguin, 1848-1903）らへのインスピレーションの関係などを、海のモチーフを手がかりに探っていきたい。

---

[1] Cf. 柏倉康夫『マラルメの火曜会』(丸善ブックス, 1994)

2．“アナベル・リー”とマラルメ

“アナベル・リー”はポーが死ぬ年に書いた最後の詩であり、その２年前に24歳で病のため亡くなった妻、バージニアに対する切ない想いをうたっている。バージニアに初めてポーが出会ったのは、彼女が６歳、ポーが20歳の時であった。養父の家を飛び出して軍隊に身をおいていたポーが、除隊後、居場所がなくなりバージニアのいた親戚の家に身を寄せたときのことである。７年後、２人は結婚することになった。叔母のクレム夫人に幻の母親像をポーは見出し、天使のような無垢なバージニアに対して、彼は妹のような愛情を抱いたのであった。実母はポーが３歳のときに亡くなったが、彼の女性・母性に対する想いは生涯を通じて何人かの女性たちに対する形で表現されることになる。

詩の冒頭、‘何年も前の昔のこと’といった書き出しや響きのよい‘海辺の王国’という言葉の繰り返しは、この詩の物語性を強く感じさせる。

It was many and many a year ago,
　　In a kingdom by the sea,
　That a maiden there lived whom you may know
　　By the name of Annsbel Lee;
And this maiden she lived with no other thought
　　Than to love and be loved by me.[2]

この一連、“sea”、“Lee”、“me”と脚韻を踏んでいるが、その他に目立つ音として〈m〉の子音がある。この音は鋭いものではなく、まろやかな印象を与える。海の情景で言うならば、荒々しくない、穏やかな波、海の表情が思い浮かべられる。ゆったりとした大きなうねりにもつながる。〈m〉は mother の〈m〉でもある。

このポーの冒頭の箇所をマラルメは次のように訳している。（詩の翻訳において、他の言語でも韻を踏んだ詩の形式に訳すことは、ほとんど不可能というほどに難しい。翻訳の問題は大きな問題であるが、今回の論考では範囲を超えるため、ここでは触れない。）

Il y a mainte et mainte année, dans un royaume près de la mer, vivait une jeune fille, que vous pouvez connaître par son nom d'Annabel Lee : et cette jeune fille ne vivait avec aucune autre pensée que

---

[2] *The Complete Tales and Poems of Edgar Allan Poe*（London: Penguin Books, 1965), p.957-58.

d'aimer et d'être aimée de moi.[3]

ここでも〈m〉の音が出てくるが、この詩の内容の重要な要素と結びついている。フランス語で海は女性名詞“mer”であるが、この語は“mere”（母）と同じ発音である。またこの連の最後に“aimer”（愛する）、“aimée”（愛される）という語も用いられている。つまり、この海の場面において、海に抱かれる、海のように深い愛情という概念が容易に想起されるのである。読者は深い愛情、深い海の色を思い浮かべることができる。

“アナベル・リー”の最後の連でポーは、海のそばにある彼女の墓の傍らに、自らの身を横たえると詠っている。

And so, all the night-tide, I lie down by the side
Of my darling – my darling – my life and my bride
In her sepulchre there by the sea,
In her tomb by the sounding sea.

1849年10月、ポーは路上に倒れているところを発見され、４日後に亡くなった。その２年前に若くして亡くなったバージニアの面影はずっとポーの心のうちにあったのだと思われる。死ぬ年に発表されたこの“アナベル・リー”を読むとき、ポー自身が遠からぬ日に、妻の傍らに永遠に身を横たえることになるという予感めいたものを感じとることができるのである。

マラルメによるこの作品の最終部分の訳は、次のようになっている。

. . . et, ainsi, toute l'heure de la nuit, je repose à côté de ma chérie, – de ma chérie, – ma vie et mon épouse, dans ce sépulcre près de la mer, dans sa tombe près de la bruyante mer.

Mais, pour notre amour, il était plus fort de tout un monde que l'amour de ceux plus âgés que nous; – de plusieurs de tout un monde plus sages que nous, – et ni les anges là-haut dans les cieux ni les démons, sous la mer ne peuvent jamais disjoindre mon âme de l' âme de la très belle Annabel Lee.

最後の一連、ポーとは異なっている。これは最後の連とその１つ前の連をマラルメが入れ替えているからである。わたし（詩人）とアナベル・リーとの愛は何ものにも引き離されることのない強

[3] *Œuvres Complètes de Stéphane Mallarmé*, ed Henri Mondor et G.Jean-Aubry (Paris: Gallimard, 1945), p.201-02.

いものだと詠い、マラルメは２人の愛の強さを確認してこの詩を締めくくっている。海の中にいる悪魔まで登場する。海には魔物も住んでいるのである。(海のモチーフに関連して、ボードレールがグレイ(Thomas Gray, 1716-71)の表現を借りている詩があるが、海の色の表現について考える次稿で取り上げることにする。[4])

３．ドビュッシーの海

ドビュッシーはマラルメの火曜会に出入りする（1890）前から、すでにボードレールの詩に曲をつけたり（1887－89)、また、『アッシャー家の崩壊』のオペラ化に着手（1908：作品は未完）するなど、彼自身がポーに深い関心を寄せていた。

19－20世紀の世紀の変わり目の頃には、音楽家として彼の立場は確立し、フランスを代表する音楽家の１人になっていた。1903年にレジオン・ドヌール勲章（５等）(Chevalier de la Légion d'Honneur)を受勲している。しかしながら、私生活においては、最初の妻リリーと離婚（1905)、２度目の妻となるエマ（人妻であった）との恋愛（1908年正式に結婚)、リリーの自殺未遂など、彼の身辺・心情は大いに揺れていた。

作品『海—管弦楽のための３つの交響的エスキス(素描)』(“La Mer”–Trois esquisses symphoniques pour orchestre, 1903-05）はこのような状況の中で生まれた。同じ1905年、エマとの間に娘(Claude-Emma、愛称 Chouchou)も生まれた。彼の『海』は次の３楽章から構成されている。

第１楽章　De l'aube à midi sur la mer　（海の夜明けから昼まで）

第２楽章　Jeux de vagues　（波の戯れ）

第３楽章　Dialogue du vent et de la mer　（風と海との対話）

波や風、また時間の移ろいの中で海はさまざまに変化した表情をみせる。人の心、心情、愛憎を反映した大波、小波、すべてを母なる自然、海は受けとめる。[5] 光を反射した波のきらめきを思わせる表現には、当時の画家たちがスタジオから戸外にでて描いた、印象派の光の表現にも通じるものがある。

---

[4] Cf. サルトルは海のテーマとボードレールの詩想について論じている。ジャン＝ポール・サルトル『マラルメ論』渡辺守章・平井啓之訳（ちくま学芸文庫, 1999), p.129.

[5] ここではこの曲の管弦楽器の構成について記したり、またスコアを掲載する代わりに、曲全体の雰囲気を伝えるため、あくまでこの曲の印象を以下に記すこととしたい。第１楽章は、おだやかに始まり、弾むような展開となる。後半は太陽の光を海が受けるかのように、力強く威厳に満ち、また快活な明るい雰囲気となる。第２楽章はダンスのステップを踏むかのような軽やかな波の表現と、その後、激しさを感じさせる水の動きとなる。最終の第３楽章では、不安感を感じさせるような、暗い低い音から始まる。低音部と高音部の二項対立があり、最後にすべての音が重なり合い、クライマックスを迎える。『海』は全体でおよそ 23－24 分の曲である。

この作品、『海』は『牧神の午後への前奏曲』のときのように、マラルメの直接的な影響のもとに創作が始まったわけではなかった。1903年頃、最初の妻リリーの実家がある、パリ郊外で始められたらしい。海のモチーフは、１つの平面上での影響関係というよりも、もっと普遍的なテーマと捉えられるからである。ただ、おそらく火曜会では、さまざまなことが話題になったと思われる。サロンの役割については後に改めて触れたい。

４．マラルメと画家たち

印象主義詩人とも呼ばれたマラルメは画家たちとの交流も多かった。とりわけマネ（Édouard Manet, 1832-83）との交遊は有名であった。（マネの画風を擁護したり、マネの挿絵で本を出版するなど。）

マネと言えば、サロン（ここでは官展の意）でスキャンダルを引き起こした『草上の昼食』(1863；オルセー美術館）（戸外でのピクニックの場面で、女性のみを裸体で描いた。）や、『オランピア』（1863；オルセー美術館)、また晩年の『フォリー・ベルジェールの酒場』(1882；ロンドン大学コートールド美術研究所）の絵がすぐに思い浮かべられる。彼は人物の衣服に黒の色を多用した、彼自身がダンディーな画家でもあった。マラルメはしばしばマネのアトリエを訪れていたという。マネに描いてもらったお気に入りの肖像画（1876；オルセー美術館）は長くマラルメの家に掛けられていた。[6]

マネはどちらかといえば、人物画の画家としての印象の方が強いのかもしれない。しかし16歳の頃、ブラジル行きの訓練船に乗った海上経験も持っているのである。『キアサージ号とアラバマ号の海戦』(1864；フィラデルフィア美術館）の絵では、深い色をした海の上で起きる帆船同士の戦いを描いている。海面の描写は単なる船の背景というよりも、その存在を前面に強く押し出している感を受ける。

また、ゴーギャンもマラルメの火曜会に出席していた画家の１人である。文明に汚されていない南の楽園を求め続け、タヒチに赴いた画家として知られているが、マラルメやマネを尊敬していた。マラルメは南海に赴くゴーギャンの気持ちを理解し、支援したといわれている。ゴーギャンはマラルメによるポーの翻訳から、画想を得たこともあった。（作品『ネバーモア』はポーの『大鴉』からのインスピレーションによるものらしい。)[7] タヒチへの渡航以前の彼の緑・青色は渡航後に、より鮮やかな色となり、またより深い色も出せるようになっている。この２色が混ぜ合わさった青緑色

---

[6] Cf. Juliet Wilson－Bareau, *Manet, Monet, and the Gare Saint-Lazare* (Washington: National Gallery of Art, 1998), pp.150-153, 155.

[7] Françoise Cachin, *Gauguin : The Quest for Paradise*, trans. I. Mark Paris (London: Thames and Hudson, 1992), p.112.

もゴーギャン独特の深い色あいとなっている。

戸外での光の表現を大切にした、モネ（Claude Monet, 1840-1926）を始めとする印象派の画家たちにとっては、海ときらめく光の描写は大きなテーマであった。

5．おわりに

マラルメは1865年の大晦日に、＜水の夢想＞と詩作との不可分性を手紙に書いている。[8] 1865年というと、「牧神の午後」の初版を書き上げた頃であるが、牧神の舞台になっているのは、シチリアである。イタリア南部、陽光をさんさんと浴びている青い海に囲まれた島のイメージを、誰もが強く抱くに違いない。

ポー、ボードレールらの＜海＞のイメージ、また当時の音楽家や、画家たちの＜海＞のインスピレーション、これらすべてがマラルメと火曜会のバックグラウンドになっていると考えられる。

英語の教師であったことは、大西洋の向こう側の新大陸、アメリカ文学の扉をマラルメに開いた。また東洋との結びつき（フランスはルイ王朝の時代から中国など東方の文化圏と積極的に接触し、絵画・文物がヨーロッパに届いていた。）も忘れてはいけない。フランス印象派と日本の浮世絵との影響関係は周知の事実である。水、海のモチーフに関するさまざまなことは、怒涛のようにマラルメに押し寄せた。17－18世紀の頃の貴婦人たちのサロンとは異なっているが、ジャンルを越えた芸術家たちの交流は、その後の20世紀の現代文化の底流となったのである。

ボードレールを含めて、マラルメの海、また彼を取り巻く芸術家たちの海について、次稿でさらに探っていきたい。

---

[8] “En effet, je ne fais plus un poème sans qu’il y coule une rêverie aquatique.” （F. Mistral への1865年12月31日付の手紙）Stéphan Mallarmé, *Correspondance complete 1862-1871* (Paris: Gallimard, 1959), p.276.

参考年表

マラルメ関連		その他	
1842	(Etienne) Stéphane Mallarmé 生まれる(3.18)		
		1849	ポー、ボルティモアで死去
		1857	ボードレール『悪の華』 初版刊行（発禁処分）
1862	詩が始めて印刷される マリーとロンドンへ（翌年結婚）	1862	ドビュッシー生まれる (Claude Debussy)
1863	フランスにもどり中学校の英語 教師になる		
1865	「牧神の午後」初版	1867	ボードレール死す
		1870	普仏戦争
1872	訳詩（アナベル・リー）発表 （自宅での集まりを開く他、他のサロンにも 出入りし、ユゴーから印象主義詩人 と呼ばれる）		
1873	画家マネと交遊。ゾラとも知り合う		
1874	雑誌 *La Dernière Mode* 発行 （主筆、編集、経営を行う。８号まで）	1874	印象主義の画家達の第１回 展覧会
1875	初めての単行本出版 (ポーの翻訳) 『大鴉』（マネによる挿絵） 雑誌 *La République des Lettres* 創刊	1875	アメリカ（ボルティモア）ポーの 記念碑建立
1876	ロンドンの美術評論誌に「印象派 の画家達と E.マネー」を掲載		
1877	アメリカで刊行された『ポー・メモリ アル』に寄稿		
1878	英語学関連の著述		
1883	1877年頃から始めた火曜会の 名声が高まる		
		1885	ドビュッシー、ローマ留学

1887	最初のマラルメ詩集刊行 『牧神の午後』第２、第３版刊行		
		1889	エッフェル塔完成
		1890	ドビュッシー、火曜会出席
		1891	ゴーギャン、タヒチに向かう
1893	アナトール・フランス、マラルメ論を執筆する		
1894	退職が許可される オックスフォードとケンブリッジで講演を行う	1894	ドビュッシー 『牧神の午後への前奏曲』完成 （マラルメは92年に最初のものを聴いている）
1896	「詩王」に選ばれる		
1898	(9.9)　マラルメ死去(56歳) 葬儀にはヴァレリー、ロダン、ルノワールらが参列	1898	ヴァスコ・ダ・ガマ、インド就航 400年記念の刊行物 （ポルトガル女王援助；マラルメ寄稿）
		1905	ドビュッシーの『海』完成
		1912	ロシア・バレエ団が 『牧神の午後への前奏曲』のバレエ初演　（振り付け：ニジンスキー、　不評）
		1914	第一次世界大戦始まる
		1918	(3.25) ドビュッシー死去 (55歳)